

# 現代朝鮮語の反復型相互構文<sup>1)</sup>

黒島規史  
熊本学園大学

## 1. はじめに

現代朝鮮語（以下、朝鮮語と呼ぶ）では相互性（reciprocity）が述語に結合する接辞などにより表されず、相互を表す代名詞 *selo*<sup>2)</sup>（互いに）によって表される。そのためか、これまでの朝鮮語の記述において相互性はそれほど注目を浴びてこなかった。例えば、最も包括的な文法書である Suh (1994) においても、この相互的代名詞の記述があるのみである。朝鮮語には次の (1) のように動詞の能動形と受動形（あるいは自動詞と他動詞）を副動詞接辞の *-ko* でつなぐことによって相互を表す構文が存在するが、このような構文はこれまでに記述されてこなかった。(1) では *ccoch-*（追う）という能動形の動詞に *-ko* が接続し、この動詞の受動形 *ccochki-*（追われる）が続くことによって、「追い追われる」つまり互いに「追い合う」という相互の意味が表される。

- (1) 이삼 분 동안 쫓고 쫓기다가 둘 다 지쳐 무대 한가운데 마주 멈추어 선다.  
i sam pwun tongan **ccoch-ko** **ccochki-taka** twul ta  
二三 分 間 追う-ADV.ENM 追われる-ADV.DISC 二人 いずれも  
cichy-e mwutay hankawuntey macwu memchwu'e se'nta.  
疲れる-ADV.SEQ 舞台 真ん中 向き合って 止まる-ADV.SEQ 立つ-IND.NPST  
「2,3 分間追い合っていたが、二人とも疲れて舞台の真ん中で向き合い立ち止まる。」  
[BRGO0357]<sup>3)</sup>

これ以降、便宜的に (1) のような構文を反復型相互構文と呼ぶ。後述するように、語彙的受動を用いる場合は、同じ動詞語幹を反復させているとは言えないが、同じ特徴を有する構文と見なし、反復型相互構文と呼ぶことにする。

本稿はこのような反復型相互構文を記述することを目的とした研究である。本研究では反復型相互構文にどのようなパターンがあるのかを記述したうえで、この構文は定形節に現れることはあまりないこと、相互的代名詞 *selo* との共起においては *selo=lul*（相互的代名詞+対格助詞）は不自然になることが多いこと、この相互構文が構文としての性格を備え、副動詞接辞 *-ko* による他の反復型の構文とともに、類像性

<sup>1)</sup> 本稿は第 67 回朝鮮学会大会（2016 年 10 月 2 日）において口頭発表した「現代朝鮮語の統語的相互構文」の内容を修正したうえで、大幅に加筆したものである。

<sup>2)</sup> ハングルは Yale 式転写によってラテン文字表記する。ただし、両唇音字の後の *u/wu* の区別はしない。

<sup>3)</sup> 例文を 21 世紀世宗計画コーパスから引用する場合は、作品のファイル名を示す。コーパスについては 3 節で詳しく述べる。

を持った構文であることなどを明らかにする。

本稿の構成は以下のとおりである。続く2節では先行研究を参照しながら、語彙的手段による相互と、統語的相互について概観する。3節では本研究の調査方法について述べる。4節から考察に入り、朝鮮語の反復型相互構文のタイプを分類したうえで、意味的、形態的特徴について指摘する。そして5節では相互的代名詞と反復型相互構文の共起関係について調査した結果を報告する。6節では反復型相互構文を含む、副動詞接辞・koによる反復型構文との関連を類像性の観点から述べる。最後に7節は本研究のまとめと今後の課題である。

## 2. 朝鮮語の語彙的相互と統語的相互

これまでの朝鮮語の研究においては、語彙的な相互を扱った研究はいくつかあったものの、統語的な相互を扱った研究はほとんどなかった。

Haspelmath (2007: 2088) は相互的状况 (mutual situation) を「二人以上の参加者 (A, B...) がいる状況において、少なくとも A と B の二人の参加者について、A と B の関係と B と A の関係が同じ」であると定義している。例えば、「A が B に会った」と言えば、それは同時に「B が A に会った」ことを意味する。本研究ではこのような相互的状况を表す構文を相互構文と呼び、A, B という参加者が共に同じ行為をする同伴構文は相互構文と区別する。また、語彙的な手段による相互構文と、統語的な手段による相互構文を区別し、主に後者のみを扱う。

朝鮮語の研究においては、相互構文と類似した対称構文と同伴構文が論じられてきた。これらの構文の区別をはっきりと打ち出している Hong (1985, 1986) の研究をまとめる。Hong (1986) では対称構文、同伴構文、相互構文の例として、次の (2) から (4) を挙げている。これらの構文の特徴はいくつか指摘されているものの、決定的なのは selo (互いに) と hamkkey (ともに) との共起関係である。(2) の対称構文は selo の共起は随意的かつ hamkkey の共起は不可能、(3) の同伴構文の場合は selo の共起は不可能かつ hamkkey の共起は随意的、(4) の相互構文の場合は selo の共起は必須かつ hamkkey の共起は不可能である。

(2) 철수는 영희와 ((서로) + \*함께) 결혼하였다.

chelswu=nun yenghuy=wa ((selo) + \*hamkkey) kyelhonhay=ess-ta.

PN=TOP PN=COM 互いに 一緒に 結婚する-PST-IND

「チョルスはヨンヒと ((互いに) + \*一緒に) 結婚した。」(Hong 1986: 256)

(3) 철수는 영희와 (\*서로 + (함께)) 광주에 갔다.

chelswunun yenghuywa (\*selo + (hamkkey)) kwangcwu=ey ka-ss-ta.

PN=TOP PN=COM 互いに 一緒に 光州=DAT 行く-PST-IND

「チョルスはヨンヒと (\*互いに + (一緒に)) 光州に行った。」(Hong 1986: 257)

(4) 철수는 영희와 (서로 + \*함께) 믿었다 / 의지했다.

chelswu=nun yenghuy=wa (selo + \*hamkkey) mit-ess-ta / uycihay-ss-ta.  
PN=TOP PN=COM 互いに 一緒に 信じる-PST-IND 頼る-PST-IND  
「チョルスはヨンヒと(互いに+\*一緒に)信じた/頼った。」(Hong1986: 258,  
一部例文中の記号を変更している)

Hong(1985, 1986)の分類した三つの構文では、(2)のような対称構文の動詞が、本来的な相互性を持つ動詞だと考えられる。朝鮮語の共格助詞 =wa/kwaの研究である江波戸(2005)の調査では selo を必須とする動詞がなかったことから、対称動詞と相互動詞を区別せず、対称相互動詞と呼んでいる。

崔昌玉(2010)は朝鮮語の相互構文の分類を試みている。この論考も macwu(向き合っ)、selo(互いに)等の副詞による統語的相互を除けば、基本的に語彙的相互を扱っている。崔昌玉(2010)では *twisek-ki* (入り乱れる), *ewul-li* (付き合う)等のヴォイス接辞<sup>4)</sup>による派生動詞、*mac-se* ((相立つ) 対決する)のように接頭辞 *mac*の付いた動詞、*tathwu* (言い争う)、*manna* (会う)のように本来的に相互行為を表す動詞を分類している。

以上、これらの先行研究において扱われてきたのは基本的に語彙的な相互であり、他に *macwu* や副詞的に振る舞う *selo* を含む統語的な相互であった。本研究で扱う反復型相互構文は考察されてこなかったため、まず記述的研究が必要である。

### 3. 調査方法

用例を収集し、例文を帰納的に分析する方法を採用しているが、一部朝鮮語母語話者に例文の容認度を判断してもらった。用例は韓国の国立国語院が提供している 21世紀世宗計画コーパスを利用した。コーパス資料は現代語書きことばのうち、全てを検索対象とした。資料には新聞、雑誌、小説や教育資料など様々含んでいる。コーパスの規模は、全 1,980,753 文 (35,882,340 語節<sup>5)</sup>) である。このように大量のコーパスを対象とした理由は、本研究で扱う反復型構文が、それほど出現頻度の高い構文ではないからであり、ある程度出現頻度に関して考察しようとする、なるべく大量の資料が必要となるからである。統計的な情報はこのコーパスの調査に基づいている。

例えば、辞書にも立項されており、複合動詞と見ることが出来る *cwu-ko+pat* (やりとりする) は全 1971 例出現したが、比較的用例の多かった *ccoch-ko ccochki* (追い追われる) でも全 49 例が出現したのみであった。

このような大規模なコーパスであっても検出されない例があるため、実際の使用例があるということを確認するために、Google の提供する Google ブックス<sup>6)</sup>で用例の

<sup>4)</sup> ヴォイス接辞については 4.2 節で説明を加える。

<sup>5)</sup> 語節とは朝鮮語の分かち書きの単位で、日本語の文節とも似ている単位である。

<sup>6)</sup> Google ブックスは Google 社が提供する書籍の検索サービスである。著作権によって保護されている部分があるものの、書籍本文の一部を閲覧することもできる。

検索を行った。その際、他言語からの翻訳であると判断できる場合には対象から除外している。

#### 4. 朝鮮語の反復型相互構文

反復型相互構文は、構文としての性格を持っている。この構文はヴォイス接辞を用いるタイプ、受動形を派生するのに接語を用いるタイプ、語彙的受動動詞を用いるタイプ、反意語同士を結合するタイプに分類することができる。意味的にはA, Bという二人ないし二つの主体間の相互もあれば、複数の主体間の相互もありうる。後続する動詞は非定形であることが大半であり、二つの動詞の語順はある程度固定されているということができる。それぞれ以下で詳述していく。

##### 4.1. 構文としての反復型相互構文

本研究で対象としている反復型相互構文は、複合的な表現の意味が、それを構成する各要素からどれほど予測可能かという、構成性の原理だけでは説明できない構文としての特徴を備えている。

構文 (construction) とは「文法の一般原理でも語彙的知識でもない、形と意味との慣習化された統合体」(大堀 2001: 526) である。反復型相互構文は次のような構文によって相互を表す。

(5) 

{能動形／他動詞}	·ko	{受動形／自動詞}
-----------	-----	-----------

副動詞接辞 ·ko は継起的な意味 (～てから) や列挙の意味 (～て、～て、…) も表すことができる。(5) のような構文で現れているからといっても、単に同一主体の継起的な動作を表す場合もあるにも関わらず、相互の意味を表すところに構文としての特徴がある。また、4.7 で述べるように後続する動詞が非定形で現れる場合が多いというのもこの構文の特徴である。この反復型相互構文は、二つの動詞の形態的、意味的な特徴によって四つに分類することができるが、それぞれの構文としての慣習化の程度は一定ではない。

- (6) a. ccoch·ko ccochki· (追い追われる=追い合う)  
b. cwuko+pat· (与えもらう=やりとりする/交互に話す)  
c. chiko+pat· (打ち受ける→殴り合う)

例えば、(6a) の場合、「A が追い、B が追われる」そして「B が追い、A が追われる」ということで「追い合う」という意味になっており、意味的な透明性がある。(6b) は「A が与え、B がもらう」そして「B が与え、A がもらう」ということで「やりとりする」という相互の意味になるのは、(6a) と同様である。ただし、(6b) には「交互に話す」つまり、目的語がなんらかの言語行為に関わる名詞に限定される、ある意味

に特化した用法がある。このような意味の特化は単純に予測可能なものではない。(6c)の場合、先行する動詞 *chi·* は「打つ、たたく、殴る」という意味があるが、後続する動詞 *pat·* は「受ける、もらう」という意味で、これ単独では殴られるという意味にはならない。よって、(6c) はまったくこの構文でなければ「殴り合う」という意味にはならないのである。このように見ると、(6a) から (6c) になるに従って、より意味的に慣習化されているといえることができるだろう。この慣習化の程度は後続する述語の定形として現れやすいかにも関わっており、4.7 で見るように (6b)、(6c) の場合は定形でも現れやすい。

反復型相互構文はこのように構文としての性格を持っているが、この構文は形式と意味の間にある程度の予測可能性がある。このことについては6節で詳述する。

#### 4.2. ヴォイス接辞を用いるタイプ

ヴォイス接辞によって能動形、受動形を派生させるタイプの場合、すでに3節で述べたように、後の述語が定形節述語となることはほとんどなく、連体節や副詞節述語になる傾向がある。

ヴォイス接辞とは固有語動詞に付き使役形を派生させる *-i·, -hi·, -li·, -ki·, -iwu·, -wu·, -kwu·, -chu·* であり、受動形を派生させるのにも使役と同じ *-i·, -hi·, -li·, -ki·* を用いる。ヴォイス接辞は使役、受動の派生だけでなく、動詞の自他を派生させたり、形容詞から動詞を派生する機能も担っている。

ヴォイス接辞を用いる反復型相互構文は次のような例である。(7) では *ccoch·* (追う) に副動詞接辞の *-ko* が付き、同じ動詞にヴォイス接辞 *-ki·* が付くことによって受動形の *ccoch·ki·* (追われる) を派生させることで「互いに追い追われる」という相互の意味を表している。同様に (8) では *cwuk·* (死ぬ) と *cwuki·* (殺す) を *-ko* がつなぎ、相互の意味を表している。(7) は能動形と受動形、(8) は自動詞と他動詞の組み合わせである。

(7) 동등한 자리에서 이제는 쫓고 쫓기는 입장에 선 두명의 대결.

tongtungha·n cali=eysel icey=nun **ccoch·ko** **ccochki·nun**  
 同等だ-ADN.NPST 地位=ABL 今=TOP 追う-ADV.ENM 追われる-ADN.NPST  
 ipcang=ey se·n twu myeng=uy taykyel.  
 立場=DAT 立つ-ADN.PST 二 名=GEN 対決

「対等な立場から今や追い合う立場に立った二人の対決。」 [CA98L357]

(8) 어찌 모두들 그렇게 죽고 죽이는 것일까.

ecci motwu=tul kuleh·key **cwuk·ko** **cwuki·nun** kes=i·lkka.  
 なぜ 皆=PL そうだ-ADV.MNN 死ぬ-ADV.ENM 殺す-ADN.NPST こと=COP-UNCT

「なぜ皆そんな風に殺し合うのだろうか。」 [CE000024]

この (7)、(8) では後の述語は非過去の連体形 *-nun* が結合している。4.7 で後述するように、反復型相互構文は定形節の述語になることがほとんどない。また、(7) では後の述語にヴォイス接辞 *-ki-* が、(8) では *-i-* が付くことでそれぞれ受動形、他動詞を派生させているが、4.8 で後述するように反復型相互構文においては形態的に有標な方が後に位置することが多い。

ヴォイス接辞を用いるタイプには以下のような例がある。コーパスに現れなかった例については、Google ブックスにて用例を検索し、実例があることを確認している。

- (9) *wuski-ko wus-* (笑わせ笑う)、*ccilu-ko ccilli-* (刺し刺される)、*nakk-ko nakki-* (釣り釣られる、騙し騙される)、*kulk-ko kulkhi-* (けなしけなされる)、*mwul-ko mwulli-* (噛みつき噛みつかれる)、*ssip-ko ssiphi-* (無視し無視される)、*ttut-ko ttutki-* (むしりむしられる)、*mil-ko milli-* (押し押される)、*kka-ko kkai-* (非難し非難される) ...etc.

#### 4.3. 受動形を派生する接語を用いるタイプ

受動形を派生する接語<sup>7)</sup>を用いるタイプも、4.2 で見たヴォイス接辞を用いるタイプと同様の傾向を見せ、定形動詞で現れることはなく、語順も能動、受動が一般的である。

受動形を派生させる接語は名詞に *=tangha-* (被る)、*=pat-* (受ける) を付けるタイプが一般的である。このような接語を用いるのが以下の (10) から (12) のような例である。(10) は *=tangha-* を用いたタイプである。(11) と (12) は *=pat-* を用いたタイプで、前者は漢字語名詞に、後者は固有語の派生名詞にこの接語が付いている。

- (10) 세상이 험해져서 배신하고 배신당하는 사람들이 많아도, 우리한테 그런 일이 일어나지 않을 줄 알았어.

seysang=i hemhay-cy-ese      **paysin=ha-ko**      **paysin=tangha-nun**  
 世の中=NOM 険しい-INTRZ-ADV.CSL 裏切り=する-ADV.ENM 裏切り=PASS-ADN.NPST  
 salam=tul=i manh-ato, wuli=hanthey=n kule-n      il=i  
 人=PL=NOM 多い-CONC 私達=DAT=TOP そうだ-ADN.NPST こと=NOM  
 ilena-ci anh-ul cwul al-ass-e.  
 起きる-NMLZ NEG-ADN.IRR こと 知る-PST-IND.NPOL

「険しい世の中になって、裏切り合う人達が多くなっても、私達にはあんなこと起

<sup>7)</sup> 例えば、*kepwu=tangha-* (拒否される) は漢字語 *kepwu* (拒否) と *=tangha-* (被る) から成る。*=tangha-* は接尾辞のようにも見えるが、両者の間に *=(n)un* (〜は) のような助詞を挿入できることから接辞ではなく接語と考えられる。あるいは、宮岡 (2015) にならい準前接語と呼ぶ考えもありうる。宮岡 (2015: 100) では「本来的な接語と、自立語から (恒常的あるいは臨時的に) 接語化した「準接語 non-enclitics」の2種」を区別している。そして、宮岡 (2015: 262) は日本語の「(自立) ≠する・」や「(猫=で) ≠ある・」の「≠する」、「≠ある」を準前接語と分類している。

こらないと思つた。」[김정숙 (2019) “사랑 위에 서다”]<sup>8)</sup>

- (11) 존경하고 존경받는 사이에는 그 '존경'의 성스러움을 오래 지키기 위하여  
감추어야 하는 부분이 반드시 생기게 될 것이다.

conkyeng=ha·ko conkyeng=pat·nun sai=ey=nun ku 'conkyeng'=uy

尊敬=する-ADV.ENM 尊敬=PASS-ADN.NPST 間=DAT=TOP その 尊敬=GEN

sengsulew·um=ul olay cikhi·ki wihay·e kamchwu·eya ha·nun

神聖だ-NMLZ=ACC 長い間 守る-NMLZ ためだ-ADV 隠す-OBLG-ADN.NPST

pwupwun=i pantusi sayngki·key toy·l kes=i·ta.

部分=NOM 必ず 生じる-ADV.MNN なる-SPEC=COP-IND

「尊敬し合う間柄には、その『尊敬』の神聖さを長い間守るために、隠さなければ  
いけない部分が必ずできることになるだろう。」[CH000046]

- (12) 그렇게 해서 아무쪼록 서로 돕고 도움받으며 살아가게끔 길러내야 하지  
않겠는가?

kuleh·key hay·se amwuccolok selo top·ko

そうだ-ADV.MNN する-ADV.SEQ どうか 互いに 助ける-ADV.ENM

tow·um=pat·umye salaka·keykkum killenay·ya ha·ci

助ける-NMLZ=PASS-ADV.SIM 生きていく-ADV.MNN 育てあげる-OBLG-NMLZ

anh·keyss·nunka?

NEG-PROB-INTRR

「そうしてどうにかお互いに助け合いながら生きていけるように育てあげなければ  
ならないんじゃないか?」[3BH40009]

その他の受動形を派生する接語を用いるタイプを挙げる。

- (13) sokay=ha·ko sokay=pat· (紹介し紹介される)、salang=ha·ko salang=pat·  
(愛し愛される)、peli·ko peli·m=pat· (捨て捨てられる)、  
saki=chi·ko saki=tangha· (詐欺し詐欺される)、iyong=ha·ko iyong=tangha·  
(利用し利用される) ...etc.<sup>9)</sup>

<sup>8)</sup> Google ブックスからの引用である。作品の URL は末尾にまとめて示す。

<sup>9)</sup> 受動形を派生させるのに =toy· (なる) が用いられる場合もあるが、派生させるのは単なる自動詞の場合も多く、また、相互という性質上、主体は友情物であることが多いこともあり、そのような条件に該当する =toy· (なる) を用いた反復型相互構文を、論文投稿時には見つけることができなかった。しかし、匿名の査読者からの指摘により再考したところ、いくつか受動形を派生させるのに =toy· (なる) を用いる例を見つけることができた。例えば、selo phoham=ha·ko phoham=tow·nun kwankyey (互いに 包含=する-ADV.EMM 包含=PASS-ADN.NPST 関係) [김한규 (2004) “오동사”] のような例である。

#### 4.4. 語彙的受動形動詞を用いるタイプ

語彙的受動形動詞を用いるタイプもこれまで見てきたヴォイス接辞、受動形を派生させる接語を用いるタイプと同じ傾向を見せるが、このタイプに分類できる動詞は少ない。

派生接辞などなしで受動の意味を表す動詞には **mac-** (殴られる) がある。その他、**sok-** (騙される) も該当するが、この動詞はヴォイス接辞 **i-** を付加することで **sok-i-** (騙す) という他動詞を派生するので、ヴォイス接辞を表すタイプに分類しておいた。(14) が **mac-** を用いた例で、能動形の **ttayli-** (殴る) はまったく別語根の動詞である。

- (14) 조용한 가운데, 섬뜩할 정도로 조용한 가운데 오로지 때리고 맞는 동작만 되풀이하고 있었다.

coyongha-n kawuntey, semttukha-l cengto=lo coyongha-n  
 静かだ-ADN.NPST 中 ぞっとする-ADN.IRR ほど=INST 静かだ-ADN.NPST  
 kawuntey oloci **ttayli-ko mac-nun** tongcak=man  
 中 ただ 叩く-ADV.ENM 殴られる-ADN.NPST 動作=だけ  
 toyphwuliha-ko iss-ess-ta.  
 繰り返す-ADV PROG-PST-IND

「静かな中、ぞっとするほど静かな中、ただ殴りあう動作だけが繰り返されていた。」

[BRE00076]

もう一つこのタイプに分類できそうな例に、**chi-ko+pat-** (殴り合う) がある。これは辞書にも立項されており、複合動詞としても見なせるが、構文としては反復型相互構文のパターンに当てはまると考えられる。韓国で最も大部の辞書である『標準韓国語大辞典』では **chi-ko+pat-** に「互いに言葉で言い争ったり、実際に殴りながら喧嘩する」<sup>10)</sup> という語釈を与えている。**chi-ko+pat-** の **chi-** は「打つ、たたく」で、**pat-** は「受ける」である。この **pat-** 単独で **mac-** (殴られる) のような受動の意味があるわけではないので、**chi-ko+pat-** という組み合わせのときのみの意味ということになる。**mac-** (殴られる) とは異なるものの、**chi-** に対して受動的な意味を担っているということから、語彙的受動のタイプに分類しておく。例を (15) に挙げる。

- (15) 치고받는 싸움이 일어나는 경우는 아주 드물지만 다투는 일들은 가끔 있다.

**chi-ko+pat-nun** ssawu-m=i ilena-nun kyengwu=nun  
 打つ-ADV.ENM+受ける-ADN.NPST 喧嘩する-NMLZ=NOM 起きる-ADN.NPST 場合=TOP  
 acwu tumwul-ciman tathwu-nun il=tul=un kakkum iss-ta.  
 とても まれだ-ADV.AVS 言い争う-ADN.NPST こと=PL=TOP 時々 ある-IND.NPST

<sup>10)</sup> 辞書は Web 版 (<https://stdict.korean.go.kr/main/main.do>) を参照した (最終閲覧日: 2021 年 3 月 3 日)。

「殴り合うような喧嘩が起こる場合はとても珍しいが、言い争うことは時々ある。」  
[BRHO0111]

#### 4.5. 反意語を結合するタイプ

反意語に分類できるタイプの代表としては *cwu·ko+pat·* (やりとりする)、*mil·ko tangki·* (押し引きする)、*iki·ko ci·* (勝ち負ける) がある。このタイプに分類できるものも語彙的受動を用いるタイプと同様多くないと考えられる。

*cwu·ko+pat·* (与える+受ける) は語彙的受動を用いる *chi·ko+pat·* (殴り合う) と同様に辞書にも立項されている、複合動詞と見なせる例である。*cwu·ko+pat·* は延世大学校言語情報開発研究院 (1998: 1677) では「① お互いに与え、またもらうこと」と「② お互い交互に話すこと」という二つの意味を挙げている。それぞれの例を (16)、(17) に挙げる。

(16) 육체적 건강과 정신적 건강은 서로가 영향을 주고받고 하는 관계에 있기 때문에 어느 것이 더 중요하다고 말할 수 없다.

yukcheycek kenkang=kwa cengsincek kenkang=un selo=ka  
肉体的 健康=COM 精神的 健康=TOP お互い=NOM  
yenghyang=ul **cwu·ko+pat·ko** ha·nun kwankyey=ey  
影響=ACC 与える-ADV.ENM+受ける-ADV.ENM する-ADN.NPST 関係=DAT  
iss·ki ttaymwun=ey enu kes=i te cwungyoha·ta·ko  
ある-NMLZ ため=DAT どのもの=NOM さらに 重要だ-IND.QUOT-COMP  
malha·l swu eps·ta.  
言う-ADN.IRR すべ ない-IND.NPST

「肉体的健康と精神的健康はお互いが影響を与え合う関係にあるため、どちらがより重要だということは言えない。」(延世大学校言語情報開発研究院 1998: 1677)

(17) 그들은 나직한 소리로 무슨 이야기인지 정답게 주고받고 있었다.

kutul=un nacikha·n soli=lo mwusun iyaki=inci cengtap·key  
彼ら=TOP 低めだ-ADN.NPST 声=INST なにか 話=INDF 仲がよい-ADV.MNN  
**cwu·ko+pat·ko** iss·ess·ta.  
与える-ADV.ENM+受ける-ADV PROG-PST-IND

「彼らは低めの声でなんの話だか、仲よく話し合っていた。」(延世大学校言語情報開発研究院 1998: 1677)

*mil·ko+tangki·* (押す+引く) は複合語として、「他人と喧嘩腰でやりあう」という意味では延世大学校言語情報開発研究院 (1998: 766) に立項されており、これも相互的な意味を表していると見ることができる。

(18) 명훈은 더 밀고당기고 할 여유도 없이 상대가 바라는 대로 행동해야만 했다.

myenghwun=un te **mil-ko+tangki-ko** ha-l yeyu=to  
 PN=TOP さらに 押す-ADV.ENM+引く-ADV.ENM する-ADN.IRR 余裕=も

epsi sangtay=ka pala-nun taylo hayngtonghay-ya=man  
 なく 相手=NOM 望む-ADN.NPST とおり 行動する-OBLG=だけ

hay-ss-ta.

する-PST-IND

「ミョンフンはこれ以上やりあう余裕もなく、相手の望み通りに行動するしかなかった。」(延世大学校言語情報開発研究院 1998: 766)

mil-ko+tangki- は (18) のような意味の他、(19) のように相手とかけひきをするという意味で多く用いられる。

(19) 양측은 밀고 당기는 신경전 끝에 휴전하고 그들 사이에는 존경과 우정이 싹튼다.

yangchuk=un **mil-ko** **tangki-nun** sinkyengcen kkuth=ey  
 両側=TOP 押す-ADV.ENM 引く-ADN.NPST 神経戦 おわり=DAT

hyucenha-ko kutul sai=ey=nun conkyeng=kwa wuceng=i  
 休戦する-ADV.SEQ 彼ら 間=DAT=TOP 尊敬=COM 友情=NOM

ssakthu-nta.

芽生える-IND.NPST

「両サイドは押し引きする神経戦のすえ休戦し、彼らの間には尊敬と友情が芽生える。」[2BB9402]

その他、反意語の例としては iki-ko ci- (勝ち負ける)、sangche=cwu-ko sangche=pat- (傷つけ傷つけられる) という例が見つかった。

(20) 이처럼 물·불·쇠가 서로 이기고 지는 관계로 이해되고 있다.

i=chelem mwul pwul soy=ka selo **iki-ko** **ci-nun**  
 これ=EQU 水 火 鉄=NOM 互いに 勝つ-ADV.ENM 負ける-ADV.NPST

kwankyey=lo ihaytoy-ko iss-ta.

関係=INST 理解される-ADV PROG-IND.NPST

「このように、水・火・鉄が互いに相克する関係として理解されている。」

[김교빈, 이종우, 이현구, 김시천 (2014) “기학의 모험 1”]

(21) 그 속에서 서로 상처 주고 상처 받으며 살 수밖에 없는 인류에 대한 애정.

ku sok=eyse selo sangche cwu·ko sangche pat·umye  
 その中=LOC 互いに傷 与える-ADVENM 傷 受ける-ADV.SIM  
 sa·l swu=pakkey eps·nun inlyu=ey tayha·n ayceng.  
 生きる-ADN.IRR すべ=しか ない-ADN.NPST 人類=DAT 対する-ADN.PST 愛情  
 「その中で、互いに傷つけ合いながら生きるしかない人類に対する愛情。」  
 [황선미 (2018) “나도 내 감정과 친해지고 싶다”]

#### 4.6. 反復型相互構文の意味

相互の意味は  $A \leftrightarrow B$  という二者間の典型的な相互関係もあれば、 $A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow A\dots$  というように、複数の主体間の相互関係もある。

二者間の相互は (1) をはじめ多くの例が該当する。複数主体間の例としては (20) が該当する。その他、いつも複数主体間の相互になる例としては (22) がある。これは「食べ食べられる」ということで生物界の弱肉強食の関係を表している。したがって、自然と複数主体間の相互関係を表すことになる。

(22) 생물들의 먹고 먹히는 관계에 대하여 알아보자.

sayngmwul=tul=uy mek·ko mekhi·nun kwankyey=ey  
 生物=PL=GEN 食べる-ADVENM 食べられる-ADN.NPST 関係=DAT  
 tayhay·e alapo·ca.  
 対する-ADV 調べる-COHR.NPOL

「生物たちの弱肉強食の関係について探ってみよう。」 [2CC00072]

また、二者間と言っても、 $A \leftrightarrow B, C \leftrightarrow D\dots$  のように複数の主体間で起こっていると見なせる相互行為もありうる。このような例に該当するものとして (8)、(10)、(12)、(21) が考えられるが、必ずしも二者間の相互ではない可能性もある。(8) を (8)' として再掲する。(8)' では *motwu=tul* (皆) があることから複数主体であることがはっきりしている。

(8)' 어찌 모두들 그렇게 죽고 죽이는 것일까.

ecci motwu=tul kuleh·key cwuk·ko cwuki·nun kes=i·lkka.  
 なぜ 皆=PL そうだ-ADV.MNN 死ぬ-ADVENM 殺す-ADN.NPST こと=COP-UNCT  
 「なぜ皆そんな風に殺し合うのだろうか。」 [CE000024]

#### 4.7. 後続する動詞の語形

反復型相互構文は、辞書にも立項されている *chi·ko+pat·* (殴り合う) などを除くと、定動詞としては現れない。

例えば比較的まとまった数の例が収集できた *ccoch·ko ccochki·* (追い追われる) の場合、コーパスには 49 例現れたが、その全てが非定形だった。内訳を表 1 に示す。割合は小数点第 2 位を四捨五入して示す。

表 1. *ccoch·ko ccochki·* (追い追われる) の語形と出現頻度

語形	出現頻度 (割合)
·nun 非過去連体形	35 (71.4%)
·taka 副動詞 (途中)	4 (8.2%)
·mye 副動詞 (同時)	3 (6.1%)
·myense 副動詞 (同時)	2 (4.1%)
·ko 副動詞 (継起)	2 (4.1%)
·n 過去連体形	1 (2.0%)
·ten 未完了過去連体形	1 (2.0%)
·m 名詞化	1 (2.0%)
合計	49 (99.9%)

表 1 のような傾向は、他の反復型相互構文の場合も大同小異であり、大半が非過去の連体形 *·nun* で現れる。その他、副動詞も同時を表す *·mye*, *·myense* か途中を表す *·taka* というように、先行や後続ではなく同時性を持った副動詞で現れる傾向がある。

*chi·ko+pat·* の場合は全部で 76 例のうち、定動詞で現れたものが 5 例あった。他は反復型相互構文の他の例とあまり変わらず、非過去連体形 *·nun* が 33 例 (43.4%)、継起の副動詞 *·ko* が 22 例 (28.9%)、同時の副動詞 *·mye* と *·myense* が合わせて 7 例 (9.2%) で、ここに挙げたもので 8 割以上を占めている。特に、(22) に挙げた、ヴォイス接辞を用いるタイプの *mek·ko mekhi·* (食べ食べられる) は全 22 例が非過去の連体形で現れていた。その被修飾名詞は 11 例が *kwankyey* (関係) であり、弱肉強食の関係という意味で使われる。

#### 4.8. 能動形と受動形の語順

能動形と受動形、あるいは自動詞と他動詞の語順は、意味的、形態的に有標な方が後になる傾向がある。

(1) と (7) で取り上げた *ccoch·ko ccochki·* (追い追われる) は 49 例だったのに対し、(28) のような、語順が逆の *ccochki·ko ccoch·* (追われ追う) は 2 例のみであった。

(23) 드넓은 대로 한복판에서 쫓기고 쫓는 난투극이 벌어졌다.

tunelp·un                      taylo hanpokphan=eysel **ccochki·ko**      **ccoch·nun**  
 広々としている-ADN.NPST    大通り 真ん中=LOC                      追われ-ADV.ENM    追う-ADN.NPST  
 nanthwukuk=i    pelecyl·ess·ta.  
 乱闘騒ぎ=NOM      起こる-PST-IND

「広々とした大通りの真ん中で、追い追われの乱闘騒ぎが起こった。」 [BRE00092]

(8) に挙げた *cwuk-* (死ぬ) の場合は *cwuk-ko cwuki-* (死に殺す) の順が 19 例、*cwuki-ko cwuk-* (殺し死ぬ) の順が 16 例だった。ただし、前者が全て相互を表しているとは解釈できるのに対して、後者は単なる継起を表している例<sup>11)</sup>もあり、そのような例は除外している。*ppayas-ko ppayaski-* (奪い奪われる) は 4 例に対し、*ppayaski-ko ppayas-* (奪われ奪う) は 1 例であった。受動形を派生する接語を用いる場合、用例が少なくはっきりしたことはわからないが、コーパスから抽出できた例に関しては (10) から (12) のように受動形が後になる例しか得られなかった。このような例から判断すると、ヴォイス接辞や受動接語が付いた、形態的に有標な方が後になると考えることができる。また、語彙的受動や反意語の場合は語順が固定されているようであるが、受動や否定的な意味を持つ、意味的に有標な方が後に来ると考えられる。ただし、*sok-* (騙される) は、すでに述べたように受動形にヴォイス接辞が付かないという、他とは異なる派生タイプである。(24) のような *sok-ko soki-* (騙され騙す) は 7 例であったのに対し、(25) のような、語順が逆の *soki-ko sok-* (騙し騙される) は 2 例のみであった。<sup>12)</sup>

(24) 우화를 바탕으로 한 ‘수궁가’는 어려울 때는 아쉬운 소리를 하면서 서로  
속고 속이는 인간 세상을 풍자하고 있어요.

wuhwa=lul pathang=ulo ha-n            ‘swukwungka’=nun elyew-ul  
寓話=ACC    基礎=ALL            する-ADN.PST    水宮歌=TOP                            貧しい-ADN.IRR  
ttay=nun aswiw-un            soli=lul ha-myense selo sok-ko  
時=TOP            惜しい-ADN.NPST    声=ACC    言う-ADV.SIM    互いに 騙される-ADV.ENM  
soki-nun            inkan seysang=ul phwungcaha-ko iss-e=yo.  
騙す-ADN.NPST    人間            世界=ACC            風刺する-ADV            PROG-IND.NPST=POL

「寓話をもとにした『水宮歌』は貧しいときは無心をしながら互いに騙し合う人間の世界を風刺しています。」 [6BA02B28]

<sup>11)</sup> 単一主体で *-ko* が継起を表していると考えられる例は “na=to cwuki-l nom hantwu nom cwuki-ko cwuk-eya (私=も 殺す-ADN.IRR 奴 一つ二つ 奴 殺す-ADV.SEQ 死ぬ-ADV.COND)... (後略)” 「俺も殺すべき奴を一人二人殺してから死んでこそ…」 [4BE01002] のような例がある。

<sup>12)</sup> ただ、*soki-* (騙す) の後に、*sok-* (騙される) の名詞形+受動形派生接語が付いた例も 2 例あった。

(25) 이 속이고 속는 게임은 유권자인 국민이 당선자들의 헛공약을 망각하거나 식언을 용서해 왔기 때문에 끝없이 반복되고 있다.

i soki-ko sok-nun keyim=un yukwenca=i-n  
 この 騙す-ADV.ENM 騙される-ADN.NPST ゲーム=TOP 有権者=COP-ADN.NPST  
 kwukmin=i tangsenca=tul=uy hes-kongyak=ul mangkakha-kena siken=ul  
 国民=NOM 当選者=PL=GEN 偽の-公約=ACC 忘却する-ALT 食言=ACC  
 yongsehay w-ass-ki ttaymwun=ey kkuthepsi panpoktoy-ko  
 許す.ADV VEN-PST-NMLZ ため=DAT 限りなく 反復される-ADV  
 iss-ta.  
 PROG-IND.NPST

「この騙し騙されのゲームは、有権者である国民が当選者達の上辺だけの公約を忘却したり、約束を反故にされつつも許してきたために、際限なく繰り返されている。」

[BRAB0172]

(24)、(25)の例から考えると、やはり受動という意味的な基準よりも、形態的な有標性が優先されるようであるが、例が少ないためさらに規模の大きいコーパスによる調査が必要である。

#### 5. 相互的代名詞が共起した場合の統語的特徴

反復型相互構文と相互を表す代名詞 *selo* (互いに) との共起関係を調べると、*selo* に格助詞が付かず副詞的に用いられる場合は自然であるのに対し、対格助詞が付いた *selo=lul* との共起が不自然と判断されることが多い。

相互的代名詞 *selo* は、(26) のように格助詞を伴い代名詞として用いられる一方、(27) のように格助詞なしで、副詞として用いられることもある。格助詞を伴う場合、(26a) のように「相互的代名詞+主格助詞」のみ、あるいは例には示していないが「相互的代名詞+対格助詞」のみ現れることもある。また、主格と対格以外にも与格や属格助詞も結合可能である。

(26) a. 그들은 서로가 도왔다.

kutul=un selo=ka tow-ass-ta.  
 彼ら=TOP お互い=NOM 助ける-PST-IND

「彼らは助け合った。」

b. 우리는 서로가 서로를 모른다.

wuli=nun selo=ka selo=lul molu-nta.  
 私達=TOP お互い=NOM お互い=ACC 知らない-IND.NPST

「私達はお互いに (互いが互いを) 知らない。」

(27) 그들은 서로 싸웠다.

kutul=un selo ssaw-ess-ta.

彼ら=TOP 互いに 争う-PST-IND

「彼らは争い合った。」

(Suh1994: 447)

コーパスの調査結果では、反復型相互構文は(27)のように副詞として用いられた selo と共起した例はあったものの、代名詞として用いられた例はほとんどなかった。しかし、実際の例を観察すると、代名詞的な selo と共起している例も見受けられる。反復型相互構文は二つの動詞が自動詞と他動詞、あるいは能動形と受動形の組み合わせであるため、相互的代名詞がどのような格助詞を伴い、どちらの項として現れるのかは自明ではない。したがって、この点については調査する必要がある。ちなみに、今回利用したコーパスを調べてみると、反復型相互構文に関係なく相互的代名詞が現れた頻度は 19,411、主格のみが 542、対格のみが 837、主格と対格どちらもが 69 であった。

今回は 3 名の朝鮮語母語話者の方に、収集した用例を用いて相互構文である動詞句の前に selo (+格助詞) を挿入した場合の自然さを判断してもらった。判断は 3 段階「自然 (○) / やや不自然だが可能 (△) / 不自然 (×)」で行ってもらった。対象とした例は、(7)、(10)、(11)、(14)、(15)、(19)、(23)、(24)、(25) である。節のタイプを含め、どのような変数が自然さの判断に影響を及ぼすかはまだはっきりとわからないため、例は全て非過去連体形となっているものに統一した。また、今回は全て対格助詞が現れる場合のみを対象とし、cwuko+pat- (やりとりする) のような与格を支配しうる例は対象から除外している。

結果は表 2 のとおりである。表 2 では、3 名の方の判断をそのまま記載し、○を 2 点、△を 1 点、×を 0 点としたときに、2 点以下のセルを濃い網掛けに、3 点以下のセルを薄い網掛けにして示している。

表2 反復型相互構文と相互的代名詞の共起関係

(例番号) 反復型相互構文	格助詞なし	+主格	+対格	+主格 +対格
(7) ccoch-ko ccochki- (追い追われる)	○ ○ ○	○ ○ ○	× × ×	○ ○ ○
(23) ccochki-ko ccoch- (追われ追う)	△ × ×	△ ○ ×	× × ×	× △ ×
(24) sok-ko soki- (騙され騙す)	○ ○ ○	○ ○ ○	× ○ ○	○ ○ ○
(25) soki-ko sok- (騙し騙される)	○ ○ △	○ ○ △	○ × ×	○ ○ △
(10) paysinha-ko paysintangha- (裏切り裏切られる)	○ ○ ○	○ × ×	△ × △	○ × ○
(11) conkyengha-ko conkyengpat- (尊敬し尊敬される)	○ ○ ○	○ ○ ○	△ × △	○ ○ ○
(14) ttayli-ko mac- (殴り殴られる)	○ ○ ○	○ △ ○	△ ○ ×	○ △ △
(15) chi-ko+pat- (打ち受ける=殴り合う)	○ ○ ○	× △ △	○ ○ ○	○ △ ○
(19) mil-ko tangki- (押し引く)	○ ○ ○	○ × △	△ ○ ○	○ ○ ○

表2の結果にはばらつきもあるが、現段階で指摘できることを述べる。

まず、格助詞なしで、相互的代名詞が副詞的に用いられる場合と、「互いが互いを」のように主格助詞も対格助詞も用いられる場合は大体において自然と判断されることが多かった。

次に、顕著な傾向として、格助詞が付かないときはほとんどの場合に自然と判断され、逆に「相互的代名詞+対格」の場合は自然と判断された例が少ないということである。上で述べたように、「相互的代名詞+対格」がそもそも不自然というわけではなく、コーパスではわずかではあるが「相互的代名詞+主格」よりも例が多かったくらいである。このことから、「相互的代名詞+対格」の使用が不自然だというのは反復型相互構文における一つの特徴だと考えられる。(23)についてはほとんどの場合で自然と判断された組み合わせがなかったため、そもそもこの例自体がそれほど自然な例だと思われなかった可能性がある。語順を換えた(7)と(23)、(24)と(25)のペアを見ると、頻度の少ない語順の方が全体的に不自然と判断された場合が多い。語順についてはすでに4.8で述べている。

最後に、「相互的代名詞+主格」が不自然と判断された例がいくつか見られた。同じ受動形を形成する接語を用いるタイプでも(10)に対して(11)は3名とも「相互的代名詞+主格」を自然だと判断しているため、どのような要因でこのような結果にな

ったのかはまだわからない。注目されるのは、「相互的代名詞+対格」において自然だと判断された割合が多かった (15) と (19) では、他の例とは異なり、逆に「相互的代名詞+主格」が不自然だと判断された。4.4 と 4.5 で見たように、この二つは辞書にも立項されている、複合動詞とも言える例である。4.1 で述べた、構文としての慣習化の度合いが、判断に影響を及ぼしている可能性がある。<sup>13)</sup>

#### 6. 副動詞接辞・ko による他の反復型構文：類像性の観点から

反復型相互構文は、副動詞接辞・ko によって形成される他の反復型構文とともに、形態的な複数性と意味的な複数性の間に類推可能な関係がある、類像的に動機付けられた構文だということができる。

類像性とは、言語形式と意味の間に恣意的ではない、対応関係が認められることを指す。類像性にはオノマトペのように音声表現が、それが表すものとの間に類似性を持つ場合もあるが、本研究で注目するのは形と意味の間の類似性である。大堀 (2015: 235) では形と意味の間の類像性について以下のように説明している。

音声表現ではなく、語彙や文法における構造上の要素間の関係が、意味面における要素間の関係と対応する場合がある。… (中略) …これは形式面の関係から意味面の関係が (部分的に) 予測可能である状態を指す、一種の同型性である。

この類像性という概念を言語学に持ち込んだ John, Haiman は、Haiman (1980: 530) において、最もよく見られる、類像的に動機付けられた文法的操作は重複 (reduplication) であろうということを述べている。ここでは重複が表す意味には a. 複数性 (plurality)、分配性 (distributivity)、b. 反復 (repetition)、c. 強意 (intensification) があると述べている。Haiman (1980: 530-531) が引用している Schachtar & Otnes (1972) からタガログ語の例を挙げれば、以下のとおりである。<sup>14)</sup> (28a) と (28b) は部分重複によって、(28c) は完全重複によってそれぞれの意味が表されている。

(28)

a. 複数性

(ma)yaman 'rich' (sg.) : (ma)ya-yaman 'rich' (pl.)

(Schachtar & Otnes 1972: 230)

<sup>13)</sup> 本稿のもととなった発表 (脚注 1 を参照) で行ったテストでも、「相互的代名詞+対格」は不自然だと判断される例が多く、ヴォイス接辞を用いる例以外のいくつかで、「相互的代名詞+主格」が不自然だと判断された。ただし、その発表では本研究のように述語の形を統一していなかったため、本研究の結果と合わせて考えることはできないが、「相互的代名詞+対格」の使用が反復型相互構文においてあまり自然ではないということは言えそうである。

<sup>14)</sup> Haiman (1980) に従って例を挙げているが、一部 Schachtar & Otnes (1972) により訳語を改めている。

b. 行為反復<sup>15)</sup>

l(um)akad 'walk (now, once)' : (mag)la-lakad 'walk (repeatedly)'

(Schachtar & Otnes 1972: 337)

c. 強意

(ma)basag 'get broken' : (magka)basagbasag 'get thoroughly broken'

(Schachtar & Otnes 1972: 339)

Haiman (1980: 530) が指摘するように、多くの異なった言語において、これら a から c の意味が同じ形態論的手段によって表されるということは、そこに形式と意味の密接な関係があると考えることができる。以下で述べるように、a から c の意味は、朝鮮語においても反復型相互構文と同じ *-ko* 反復型構文によって表される。また、他の言語においても複数性、行為反復、強意といった意味が、相互と同じ形態論的手段で表される例が見られる。相互を含め、これらの意味は反復という形式面の量の多さが、意味の面にも反映されていると言うことができる。以下では、朝鮮語の副動詞接辞 *-ko* による反復型構文が表す複数性、行為反復、強意の例を挙げつつ、これらの意味が相互とも関連があることを、他の言語の例を参照しながら確認していく。<sup>16)</sup>

朝鮮語の *-ko* 反復型構文には (29)、(30) のように反意語同士をつないで複数性を表す構文がある。<sup>17)</sup>このような用法について油谷ほか (2018: 123) は「《反対の性質をもつ形容詞を *-ko* でつなぎ、後ろの形容詞を連体形にした形で》…や…の」という語釈を与えている。

(29) 길가에 크고 작은 돌이 흩어져 있다.

kilka=ey **khu-ko**      **cak-un**      tol=i      huthecy-e iss-ta.

道端=DAT 大きい-ADV.ENM 小さい-ADN.NPST 石=NOM 散らばる-DUR-IND.NPST

「道端に大小の石がちらばっている。」(油谷ほか 2018: 123)

(30) 멀리 높고 낮은 산들이 보인다.

melli **noph-ko**      **nac-un**      san=tul=i      poi-nta.

遠く 高い-ADV.ENM 低い-ADN.NPST 山=PL=NOM 見える-IND.NPST

「遠くに高い山や低い山が見える。」(油谷ほか 2018: 123)

(30) の被修飾語 *san* (山) には複数を表す *=tul* が付いているが、この複数接語は必須要素ではなく、(29) では *=tul* なしでも大きい石や小さい石がいくつかあるとい

<sup>15)</sup> 統語的な操作である反復 (repetition) と意味的な反復 (repetition) を区別するために、後者を「行為反復」と呼んでおく。

<sup>16)</sup> 朝鮮語以外の言語における、相互の多義性については Nedjalkov (2007) を参考にしている。

<sup>17)</sup> (29)、(30) のような構文も反復型相互構文に関連があるのではないかという指摘を、第 67 回朝鮮学大会で発表した際に油谷幸利先生にいただいた。

う複数性を表している」と解釈できる。このような複数性を表す形態的操作が、相互を表す手段にも用いられる場合は、他の言語にも見られる。例えば Mosel & Hovdhaugen (1992: 180-184) によれば、サモア語の事態の複数性を表す接頭辞 *fe-* は単独、あるいは接尾辞 *-(C)i* あるいは *-(C)a'i* とともに用いられ、複数を表すほか、これらの接尾辞が結合した場合、相互を表す。(31) は *fe-* が複数を表す例で、(31a) は接尾辞なし、(31b) は接尾辞 *-(C)i* が結合した例である。一方、(32) は相互を表す例で、(32a) は接尾辞 *-(C)i*、(32b) は *-(C)a'i* が結合している。

- (31) a. a'a "kick" (sg.): *fe'a'a* (pl.)  
 b. 'a'e "climb" (sg.): *fe'a'ei* (pl.)

- (32) a. alofa "love": *fealofani* / *fealofagi* "love one another"  
 b. mata "look": *femātaa'i* "look at one another"

(Mosel & Hovdhaugen 1992: 180-184)

*-ko* 反復型構文には (33)、(34) のように同じ動詞を反復させて、動作が複数回起こったことを表す用法がある。

- (33) 자고 또 자도 졸려.

*ca'ko* tto *ca'to* colly'e.

寝る-ADV.ENM また 寝る-ADV.CONC 眠い-IND.NPST.NPOL

「寝ても寝ても眠い。」(国立国語院 2005: 35)

- (34) 가슴에 쌓이고 쌓인 한이 어찌 쉽게 풀리겠어.

*kasum=ey ssahi'ko ssahi'n han=i ecci swip'key*

胸=DAT 積もる-ADV.ENM 積もる-ADN.PST 恨み=NOM どうして 簡単だ-ADV.MNN

*phwulli-keyss'e.*

解ける-PROB-IND.NPOL

「胸に積もりに積もった恨みがどうして簡単に解けるだろうか。」(国立国語院 2005: 35)

(33) では二つの動詞の間に副詞 *tto* (また) が割り込んでいる。反復型相互構文に関しては、二つの動詞の間に副詞や主題を表す焦点助詞 *=(n)un* (～は) などが挿入された例は得られなかった。

(33)、(34) のような行為反復と相互の連続性は中国語においても見ることができる。Liu (1999) は中国語の「V来V去 (V-lai-V-qu)」という構文が相互を表しうることを指摘している。(35) の例は参加者が複数であることで相互の意味が出るが、(36) のように参加者が複数でない場合は反復の意味になるという (Liu 1999: 126)。

(35) Women/nimen/tamen DA-lai-DA-qu.  
 1PL/2PL/3PL fight-come-fight-go  
 “We/you/they fought with each other.” (Liu 1999: 126)

(36) Wo/ni/ta DA-lai-DA-qu.  
 1S/2S/3S fight-come-fight-go  
 “I/you/he fought several times (or for a while).” (Liu 1999: 126)

さらに、朝鮮語では同じ二つの形容詞を副動詞形の *-ko* でつなぎ、形容詞で表される状態や性質が甚だしいことを表すことができる。

(37) 길고 긴 세월.  
**kil-ko ki-n** seywel.  
 長い-ADV.ENM 長い-ADN.NPST 歲月  
 「とても長い歲月 (lit. 長く長い歲月)」(国立国語院 2005: 34)

(38) 멀고 먼 나라.  
**mel-ko me-n** nala.  
 遠い-ADV.ENM 遠い-ADN.NPST 国  
 「とても遠い国 (lit. 遠く遠い国)」(国立国語院 2005: 34)

相互と強意の多義性に関しては、ムンダ語の相互を表すマーカが、形容詞と用いられ強意を表す例において見られる。ムンダ語の相互は典型的には *-pV-* という接中辞によって表される (Osada2007: 1577)<sup>18)</sup>。

(39) ako-loʔ=le da-pa-l-ke-n-a.  
 they-with=1PL.EXC.SBJ hit-REC-hit-COMPL-INTR-PRED  
 “We and they hit each other” (Osada 2007: 1582)

(40) en ma-pa-rang hoRo-ko  
 that great-REC-great person-PL  
 “that very great person/those very great persons” (Osada 2007: 1586)

本節で見てきたように、*-ko* 反復型構文は相互だけでなく複数、行為反復、強意を表すことができる。これら四つの意味は、形式的な量の多さと、意味的な量の多さに類

<sup>18)</sup> 例文 (39)、(40) で使用されているグロスは次のとおりである。  
 PL: plural, EXC: exclusive, SBJ: subject, REC: reciprocal marker, COMPL: completive,  
 INTR: intransitive, PRED: predicator,

推可能な類似性があるために、同一の統語的手段によって表されていると考えられる。

## 7. おわりに

本研究では、動詞の能動形と受動形、あるいは他動詞と自動詞を副動詞接辞 *-ko* で連結することによって相互を表す、反復型相互構文の諸特徴について記述した。まず、反復型相互構文を四つのタイプ、ヴォイス接辞を用いるタイプ、受動形派生接語を用いるタイプ、語彙的受動を用いるタイプ、反意語同士を結合するタイプに分類した。そうしたうえで、反復型相互構文は非定形で現れることが多いこと、二つの動詞の語順については形態的に有標な動詞が後続する傾向があることを明らかにした。さらに、相互的代名詞 *selo* との共起関係については、格助詞が付かず副詞的に用いられた場合は反復型相互構文との共起が自然なのに対し、対格助詞が付いた場合は不自然な場合が多いことを指摘した。最後に、反復型相互構文は、他の *-ko* を用いた反復型構文とともに形式の複数性と事態の複数性の間に類推可能な類似性という特徴があることを述べた。本研究の成果は、これまで論じられることのなかった反復型相互構文を記述したことで朝鮮語における相互とはどのような形態的手段によって表されるのかを考えるうえで欠かせないだけでなく、副動詞接辞 *-ko* による反復構文の記述を発展させたという意味でも重要である。

反復型相互構と類似したパターンは日本語で相互を表す「VつVつ」（例：持ちつ持たれつ）にも見られるが、こちらの構文はそれほど生産性がなく、日本語の場合は相互は「連用形+あう」によって専ら表される。本研究の成果は、類型論的に類似した朝鮮語と日本語の対照研究にも資するところがあると考えられる。

本研究では大規模なコーパスを使用して例を検討したが、相互的代名詞 *selo* との共起関係を調べるには用例の数が全く足りなかった。その他の例についても、さらに多くの例を用いて、本研究で指摘した事実が検討されるべきである。

《略号一覧》

ABL	ablative (奪格)	IRR	irrealis (非現実)
ACC	accusative (対格)	LOC	locative (位格)
ADN	adnominal form (連体形)	MNN	manner (様態)
ADV	adverbial form (副動詞形)	NEG	negative (否定)
ALL	allative (沿格)	NMLZ	nominalizer (名詞化)
ALT	alternative (選択)	NOM	nominative (主格)
AVS	adversative (逆接)	NPOL	non polite (非丁寧)
COHR	cohortative (勧誘)	NPST	non past (非過去)
COM	comitative (共格)	OBLG	obligation (義務)
COMP	complementizer (補文標識)	PASS	passive (受動)
CONC	concessive (讓歩)	PN	personal name (人名)
COP	copula (コピュラ)	PL	plural (複数)
CSL	causal (原因・理由)	POL	polite (丁寧)
DAT	dative-locative (与位格)	PROB	probability (蓋然性)
DISC	discontinuous (中絶)	PROG	progressive (進行)
DUR	durative (結果状態)	PST	past (過去)
ENM	enumerative (列挙)	QUOT	quotative (引用)
EQU	equative (様態格)	SEQ	sequential (継起)
GEN	genitive (属格)	SIM	simultaneous (同時)
IND	indicative (直説法)	SPEC	speculative (推量)
INDF	indefinite (不定)	TOP	topic (主題)
INST	instrumental (具格)	UNCT	uncertainty (不確実)
INTRR	interrogative (疑問)	VEN	venitive (求心)
INTRZ	intransitivizer (自動詞化)		

《参考文献》

- 江波戸文康 (2005) 「現代朝鮮語の -와/-과 について」『韓国語学年報』1: 115-153
- 崔昌玉 (2010) 「現代朝鮮語の相互構文」『韓国語学年報』6: 1-39
- Haiman, John (1980) 'The iconicity of grammar: Isomorphism and motivation', *Language* 56(3): 515-540.
- Haspelmath, Martin (2007) 'Further remarks on reciprocal constructions', In: Vladimir P. Nedjalkov (ed.) *Reciprocal Constructions* Vol. 4, 2087-2115, Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins.
- 홍재성 [Hong, Chai-song] (1985) '한국어 자동사적 대칭동사의 통사론적 정의', 『人文科學』53: 131-158.

- 홍재성 [Hong, Chai-song] (1986) ‘현대 한국어 대칭구문 분석의 한 국면’, *“동방학지”* 50: 253-288.
- 국립국어원 [国立国語院] (2005) “외국인을 위한 한국어 문법 2 — 용법 편” (外国人のための韓国語文法2—用法編), 서울: 커뮤니케이션북스
- Liu, Meichun (1999) ‘Reciprocal marking with deictic verbs come and go in Mandarin’, In: Zygmunt Frajzyngier and Tracy S. Curl (eds.) *Reciprocals: Forms and Functions*, 124-132, Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins.
- 宮岡伯人(2015)『「語」とはなにか・再考—日本語文法と文字の「陥穽」』東京:三省堂
- Mosel, Ulrike and Hovdhaugen, Even (1992) *Samoan Reference Grammar*. Oslo: Scandinavian University Press.
- Nedjalkov, Vladimir P. (2007) ‘Polysemy of reciprocal markers’, In: Vladimir P. Nedjalkov (ed.) *Reciprocal Constructions* Vol. 1, 231-333, Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins.
- 大堀壽夫 (2001) 「構文理論 — その背景と広がり」『英語青年』147(9): 526-530.
- 大堀壽夫 (2015) 「類像性」『明解言語学辞典』234-235, 東京:三省堂
- Osada, Tshiki (2007) ‘Reciprocals in Mundari’, In: Vladimir P. Nedjalkov (ed.) *Reciprocal Constructions* Vol. 4, 1575-1590, Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins.
- Schachter, P. and Otnes, Fe T. (1972) *Tagalog reference grammar*. Berkeley: University of California Press.
- 서정수 [Suh, Cheong-soo] (1994) “국어 문법”, 서울: 뿌리깊은나무
- 연세대학교 언어정보개발연구원 [延世大学校 言語情報開発院] (1998) “연세 한국어사전”, 서울: 두산동아
- 油谷幸利・門脇誠一・松尾勇・高島淑郎 編 (2018)『小学館 韓日辞典』東京:小学館

#### 【用例の出典】

- 김교빈, 이종우, 이현구, 김시천 (2014) “기학의 모형 1”:  
[https://www.google.co.jp/books/edition/%EA%B8%B0%ED%95%99%EC%9D%98\\_%EB%AA%A8%ED%97%98\\_1/XLznCgAAQBAJ?hl=ja&gbpv=0](https://www.google.co.jp/books/edition/%EA%B8%B0%ED%95%99%EC%9D%98_%EB%AA%A8%ED%97%98_1/XLznCgAAQBAJ?hl=ja&gbpv=0)
- 김정숙 (2019) “사랑 위에 서다”:  
[https://www.google.co.jp/books/edition/%EC%82%AC%EB%9E%91\\_%EC%9C%84%EC%97%90\\_%EC%84%9C%EB%8B%A4/Zq2ODwAAQBAJ?hl=ja&gbpv=0](https://www.google.co.jp/books/edition/%EC%82%AC%EB%9E%91_%EC%9C%84%EC%97%90_%EC%84%9C%EB%8B%A4/Zq2ODwAAQBAJ?hl=ja&gbpv=0)
- 김한규 (2004) “오동사”:  
[https://books.google.co.jp/books?id=JvYQAQAAMAAJ&newbks=1&newbks\\_redir=0&hl=ja&source=gbs\\_navlinks\\_s](https://books.google.co.jp/books?id=JvYQAQAAMAAJ&newbks=1&newbks_redir=0&hl=ja&source=gbs_navlinks_s)
- 황선미 (2018) “나도 내 감정과 친해지고 싶다”:  
[https://www.google.co.jp/books/edition/%EB%82%98%EB%8F%84\\_%EB%82%B4\\_%EA%B0%90%EC%A0%95%EA%B3%BC\\_%EC%B9%9C%ED%95%B4%EC%A7%80%EA%B3%A0\\_%EC%8B%B6%EB%8B%A4/cw9pDwAAQBAJ?hl=ja&gbpv=0](https://www.google.co.jp/books/edition/%EB%82%98%EB%8F%84_%EB%82%B4_%EA%B0%90%EC%A0%95%EA%B3%BC_%EC%B9%9C%ED%95%B4%EC%A7%80%EA%B3%A0_%EC%8B%B6%EB%8B%A4/cw9pDwAAQBAJ?hl=ja&gbpv=0)

## 현대 한국어의 반복형 상호 구문

구로시마 노리후미

구마모토학원대학

현대 한국어에는 동사의 피동형(혹은 자동사)과 능동형(혹은 타동사)를 부동사형어미 ‘-고’로 연결함으로써 상호(reciprocal) 관계를 나타내는 구문이 있다. 지금까지 선행연구에서는 ‘만나다’와 같은 어휘적인 상호 동사와 ‘서로’에 의한 통사적인 상호 구문에 대한 연구가 대부분이고, 본 연구에서 다루고자 하는 구문에 대한 기술은 없는 것으로 보인다.

본 연구는 이 구문을 ‘반복형 상호 구문’이라고 부르며 이 구문의 특징을 기술했다. 기술하는 데 있어서 이 구문을 네 가지 유형, 즉 (a) 피사동 접미사를 사용하는 경우, (b) 피동형을 파생시키는 접어를 사용하는 경우, (c) 어휘적 피동 동사를 사용하는 경우, (d) 반의어끼리 결합되는 경우로 나누었다. 이 반복형 상호 구문을 조사한 결과, 이 구문은 정동사로 나타나는 경우가 많지 않다는 것, 반복되는 동사의 어순은 형태적으로 유표적인 동사가 뒤에 나타난다는 것, ‘서로’와의 공기 관계에 있어서는 ‘서로를’이 부자연스럽다고 판단되는 경우가 많다는 것을 밝혔다.

본 연구에서는 더 나아가 반복형 상호 구문이 ‘크고 작다’, ‘쌓이고 쌓이다’ 등 다른 ‘-고’ 반복 구문과도 유사성(iconicity)의 관점에서 공통점이 있다는 것을 지적했다. 즉, 이런 구문들은 형태적인 복수성과 의미적인 복수성 사이에 유추 가능한 관련이 있다는 것이다.